

平成23年 6月 1日現在

機関番号：14301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2010

課題番号：19520340

研究課題名(和文) 非営利活動・研究活動支援のためのマラヤーラム語マニュアルの作成

研究課題名(英文) Compiling of Malayalam to support NPO & research activities

研究代表者

家本 太郎 (IEMOTO TARO)

京都大学・国際交流センター・准教授

研究者番号：60222832

研究成果の概要(和文)：

インド国ケーララ州での NPO・研究活動支援の為に「マラヤーラム語マニュアル」を作成した。これは約5000数百の例文(主として Andronov, M. S. (1996) R. F. (1994) および Asher, R. E. & T. C. Kumari. (1997) から採取) を伴う 58 の文法項目・表現、Andronov, M. S. (ibid.) および Moag, R. F. (ibid.) から採った主要な名詞・動詞組織の変化表、Burrow, T. & M. B. Emeneau. (1984²) から選択した語彙集(4527 語)、Moag, R. F. (ibid.) からの主要基礎語彙表からなっている。

研究成果の概要(英文)：

I have compiled A Malayalam Manual to support NPO or research activities which may be conducted at Kerala State, India. This manual consists of 58 grammatical items or expressions with nearly 5000 examples(mainly collected form Andronov, M. S. (1996), Moag, R. F. (1994) and Asher, R. E. & T. C. Kumari. (1997), comprehensive lists of inflection charts of indispensable nominal and verbal system which mainly adapted from Andronov, M. S. (ibid.) and Moag, R. F. (ibid.), selected vocabularies(4527words) of Burrow, T. & M. B. Emeneau. (1984²) and selected basic vocabularies adapted from Moag(ibid).

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	80,000	24,000	104,000
2008年度	60,000	18,000	78,000
2009年度	60,000	18,000	78,000
2010年度	60,000	18,000	78,000
総計	260,000	78,000	338,000

研究分野：言語学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：マラーヤラム語

1. 研究開始当初の背景

申請者は、修士課程在学中より一貫してタミル語、カンナダ語、マラーヤラム語を中心として、ドラヴィダ語記述言語学において研鑽を積んできた。また、平成3年度からは、本年度まで、タミル語またはカンナダ語、マラーヤラム語、ドラヴィダ言語学を京都大学文学部・大学研究科において講じてきている。これは、特に言語学、インド文献学や西南アジア史学を学ぶ学生・院生の実践的学習に寄与するものであり続けている。昭和61年度には、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所言語研修(タミル語)の現地訓練を、平成10年度には、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所言語研修(カンナダ語)の統括をそれぞれ行い、実地の言語教育を行った。この間、申請者は、「子どもの権利センター」や「アジア協会大阪」などによるNGOやNPOの活動を南インド諸言語を通じて知ることとなった。前者に関しては、毎年、インド・カルナータカ州(カンナダ語圏)の児童労働者を来日させ、その実状を日本に訴え、解決への道を探ろうというものである。これは申請者が通訳を依頼された事例であるが、児童労働のシンポジウムキャンプに招かれた児童労働者が当該現地語しか解せず、二重三重の通訳が必要であり、真のコミュニケーションが履かれたとは言いがたい。また、大阪アジア協会の事例では、簡約な南インド諸語の文法書や辞書の編纂が強く待望されていると聞く。かくのごとく、英語を介してのコミュニケーションの時代は過ぎ去り、非営利活動・研究活動従事者自体が現地言通しての意志相通が必要とされる時期が招来したのである。

このような直接的動機を踏まえ、内容としては、基本的な文法書、基本語彙集、言語文化情報を備えた小百科事典的な記述を含むカンナダ語マニュアルの作成を平成14年度萌芽的研究「現地学術調査・非営利組織(NPO)協力活動のためのカンナダ語マニュアルの作成」を行い、一応の成果を挙げ、マラーヤラム語版の作成を意図した。

上述の動機および成果を踏まえ、今回マラーヤラム語版「非営利組織(NPO)協力活動のためのマニュアルの作成」を意図した理由は、1) マラーヤラム語の行われているケララ州は、州民総生産などの経済指標で見るとインド全体では平均以下の貧困州に属するが、女性識字率、平均寿命、乳児死亡率など生命に関わる指標は、インド内で最高水準に位置し、先進国並みの数値を獲得している。

上述の動機および成果を踏まえ、今回マラーヤラム語版「非営利組織(NPO)協力活動のためのマニュアルの作成」を意図した理由は、1) マラーヤラム語の行われているケララ州は、州民総生産などの経済指標で見るとインド全体では平均以下の貧困州に属するが、女性識字率、平均寿命、乳児死亡率など生命に関わる指標は、インド内で最高水準に位置し、先進国並みの数値を獲得している。ケララ州の取り組みは、経済利潤ではなく、人間性優先の開発モデル、いわゆる「ケララ・モデル」として、インド研究者のみならず、インド内外の社会運動家にも知られている。また、近年は、住民による開発計画づくり、信用農協による発展事業、自治体と地域ビジネスの協働による地域社会の活性化など、住民行政の新たな形態の開発、インド内外で著しいインド人によるIT活動の

一環として、ケーララ州政府の電子政府への取り組みや州政府が地域社会とマイクロビジネスの協働を目指して設立したコミュニティーデヴェロプメント情報テクノロジー公社、官民協働のIT普及、また、E-Literacy教育（アクシャヤプロジェクト）の普及などの教育開発学の開発地として脚光を浴びており、日本の大学による現地インターンシッププログラムも執り行われるようになった。マラヤーラム語による研究教育活動や非営利活動には不可欠である。2) 申請者は上記のようにマラヤーラム語教育を本邦初めて行った経験を持ち、言語マニュアルの作成に十分な基礎を有している。3) マラヤーラム語地域で一般化してきているNPO活動は、今後、更に拡大されることが想定されていて、その場合、本申請によるマニュアルの作成が求められる。

2. 研究の目的

上述の動機および成果を踏まえ、今回マラヤーラム語版「非営利組織（NPO）協力活動のためのマニュアルの作成」を意図した理由は、1) マラヤーラム語の行われているケーララ州は、州民総生産などの経済指標で見るとインド全体では平均以下の貧困州に属するが、女性識字率、平均寿命、乳児死亡率など生命に関わる指標は、インド内で最高水準に位置し、先進国並みの数値を獲得している。ケーララ州の取り組みは、経済利潤ではなく、人間性優先の開発モデル、いわゆる「ケーララ・モデル」として、インド研究者のみならず、インド内外の社会運動家にも知られている。また、近年は、住民による開発計画づくり、信用農協による発展事業、自治体と地域ビジネスの協働による地域社会の活性化など、住民行政の新たな形態の開発、インド内外で著しいインド人によるIT活動の一環として、ケーララ州政府の電子政府への

取り組みや州政府が地域社会とマイクロビジネスの協働を目指して設立したコミュニティーデヴェロプメント情報テクノロジー公社、官民協働のIT普及、また、E-Literacy教育（アクシャヤプロジェクト）の普及などの教育開発学の開発地として脚光を浴びており、日本の大学による現地インターンシッププログラムも執り行われるようになった。マラヤーラム語による研究教育活動や非営利活動には不可欠である。2) 申請者は上記のようにマラヤーラム語教育を本邦初めて行った経験を持ち、言語マニュアルの作成に十分な基礎を有している。3) マラヤーラム語地域で一般化してきているNPO活動は、今後、更に拡大されることが想定されていて、その場合、本申請によるマニュアルの作成が求められる。

ケーララ州での非営利・研究活動を行う際に、現地の言語であるマラヤーラム語を用いることにより、有形無形の効果が得られることに資することを目的とした。

3. 研究の方法

報告者が年来、従事してきたドラヴィダ諸語研究を基礎として、マラヤーラム語記述主義を基本とし、運用に効果的な例文を収集する方法をとった。

4. 研究成果

音韻・文字表、5000 数百の例文収集、DEDRにおけるマラヤーラム語主要語彙約 4500 語および基礎語彙約 1300 語を入力し、簡潔文法を記述した。文法形式・表現は以下の 52 項目である：名詞複数形、連繫辞(-aaNu)、存在動詞(uNTu)、否定辞(alla, illa)、後置詞、命令形、動詞現在形、動詞過去形、動詞未来形、形容詞、比較表現、ellaam表現、副詞、感嘆表現、呼格、対格、具格、共格、与格、属格、奪格、処格、向格、koNT-形、未然表示辞(-aam)、義務表示辞(-aNam)、義務動詞(veeNam)、不定詞I形、不定詞II形(-aan/-vaan)、動詞的分詞、動詞的分詞(否定)、条件表現(-aal/-enkiI)、願望形(-aTTe)、可能表現、可能表現(否定)、引用辞(-ennu)、形容辞(-uLLa)、疑問辞(entu/eetu)、疑問表現、iSTam表現、Yes-No表現、関係辞、関係辞(後置詞付加形)、分詞的名詞、複合動詞、

授与動詞 (*tar-/koTu-*)、等位辞 (*-um*)、強調辞 (*-ee*)、疑問辞 (*-oo*)、受身表現、使役表現、付加疑問、再帰形、*aayi* 形式、「知っている」表現、「十分だ／でない」表現、「得る」表現。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[図書] (計3件)

(1) 家本 太郎、自家製版、『非営利活動・研究活動支援のためのマラヤーラム語マニュアル』、2011年・319ページ

(2) 家本 太郎、大修館書店、「タミル語」、梶茂樹・中島由美・林徹編『事典 世界のことば141』、2009年、pp.138-141

(3) 家本 太郎、三省堂、「タミル語」、石井米雄編『世界のことば・辞書の事典 アジア編』、2008年、pp.255-265

6. 研究組織

(1) 研究代表者：家本 太郎 (IEMOTO TARO)
京都大学・国際交流センター・准教授

研究者番号：60222832

(2) 研究分担者：なし ()

研究者番号：

(3) 連携研究者：なし
()